

渋沢栄一銅像のお引越し

明治 5 年 (1872) に、本郷の旧加賀藩邸の空き長屋を利用して養育院の仮施設が、翌 6 年 2 月に上野に恒久施設が作られました。渋沢は明治 7 年から、静岡の徳川藩で知遇を得た大久保一翁府知事から、共有金（七分積金）の取り締まりを依頼され、それ以来、養育院に関与するようになりました。しかし、財政基盤が定まらず、渋沢は必死に寄金を集めるなど、養育院の維持に努力し、明治 22 年にはその意義が理解され、東京市の経営となりました。その後は、名誉職吏員の養育院長として 41 年間、安達憲忠、光田健輔、入澤達吉らの活躍もあり、大塚本院を中心に社会事業は大きく発展しました。また、板橋への移転計画中の大正 12 年、関東大震災で大塚本院は壊滅し、急遽板橋に引っ越しました。板橋施設の建設が一段落したとき、養育院常設委員会（委員長は東京市長）は、市民の寄金で銅像の建設を計画しましたが、渋沢ご当人は、いやがってなかなか承諾しませんでした。

そこで、『この銅像は単に過去における養育院長としての、ご功績を記念しようと云うだけでなく、終始、渋沢の念頭を離れない養育院の構内に、百年の後も永久にこれを守護せんとする渋沢子爵の魂魄のため、定住所をお作り申し上げる意味もある・・・』と説得、『養育院のため・・・』と言う一言に初めて承諾されたといえます。

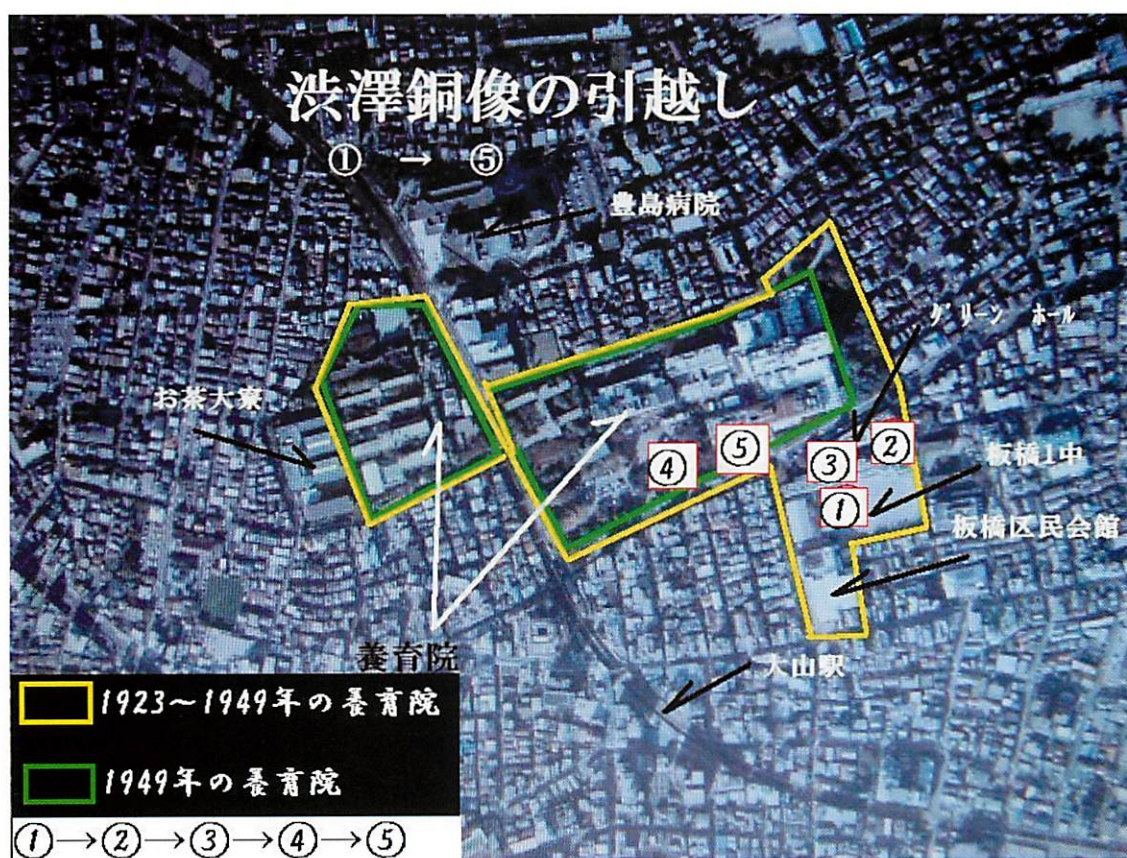


帝展・文展審査員の彫刻家、小倉右一郎の制作になる、高さ 16 尺 (4.3m)、方 20 尺 (5.4m) の花崗岩の台座に、高さ 10 尺 (3.75m)、重量 1.8 トン (480 貫) の青銅製で、フロックコート姿でソファーに座っています。大正 14 年、その落成式で、銅像を背にしてご本人が謝辞を述べている写真が、深谷市の記念館に残っています。銅像建設当時の板橋本院事務所は、現在の板橋第一中学校の校舎の辺りにあり、銅像は現在の体育館の辺りに、旧川越街道に向かって南に面して建っていました①。看護学校の卒業式などの記念写真の背景にしばしば利用されています。

昭和 16 年 (1941)、戦時の金属資源供出時にコンクリート像に変えられ、本体は供出予定で地上に降ろされていました。昭和 20 年 (1945) 3 月、米軍の B29 の東京大空襲で施設の 9 割が焼失、利用者 107 名の犠牲を出した中でこの像は残りました。

【養育院本院の戦後復興】 空襲で、建物の 9 割を失いながらも、養育院は機能を持続し、

復興の道筋が模索されました。練馬の軍用地や東村山への転地も含めて検討する一方、板橋区では独自に養育院移転を前提とした都市計画が進められ、養育院移転の区民運動が展開されました。この間様々な折衝が行なわれましたが、当時の占領下で、GHQ民政局のキャロー女子の鶴の一声で、板橋現地での存続に決着しました。すなわち、中学校、区施設、公園のための用地を区に売却し、残りの現在地に復興すると言うもので、昭和27年に新入寮が建築されました。この間銅像は校庭（現体育館）にありましたが、昭和30年（1955）に養育院官舎の西側②に移動、更に昭和32年（1957）3月30日、当時ご存命の作者、小倉右一郎監修で、現在の三角地に銅像は復元されました③。金属供出のため一旦降ろされて破損していたのを改修したものです。



施設の神様があまりにもみすぼらしい姿であると、昭和57年に、道路を隔てた④の場所に巨大な台座ごと、コロに乗せられて、交通遮断の中、しずしずと移動しました。周辺に、池や噴水のある広場が整備され、説明の看板がつけられ、銅像の作者、建立の経緯などが書いてありました。また、噴水池が作られ、中央に“よろこびの像”が造られました。（稲松）

